

令和4年度

『大隅史談会』現地研修会

1 開催日時

令和4年11月13日(日) 10時～15時 *小雨決行

**雨の強い場合は、集合場所で写真や配付資料を使って説明して、昼食をとって解散とします。ただし、雨の程度によって臨機応変の対応をします。

2 集合時刻と集合場所

○集合時刻 午前9時30分

○集合場所 垂水市文化会館駐車場(垂水市田神 2750-1)

3 参加費

一人千円(弁当代、保険代、資料代込み)

4 研修内容

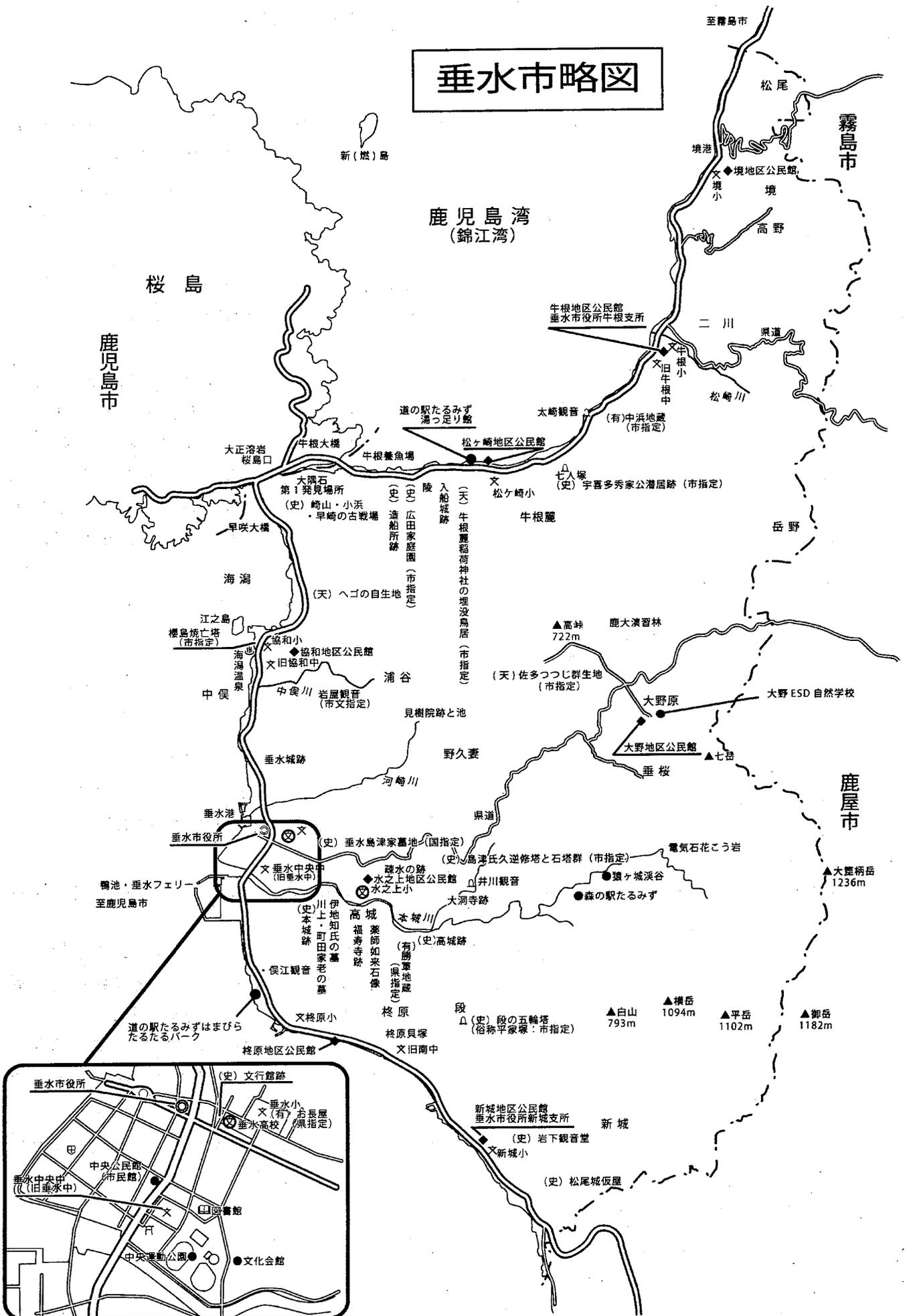
(研修場所)

- ・垂水島津家墓地(心翁寺あと)
- ・家老・川上忠實の墓碑
- ・第六垂水丸遭難碑
- ・櫻島焼亡塔(安永噴火)
- ・埋没鳥居(牛根麓)

5 コースのスケジュール

10:00 文化会館出発 →10:10 垂水島津家墓地(心翁寺跡) →10:50 家老・川上忠實の墓碑 →11:30 第六垂水丸遭難碑 →12:10 昼食(有馬邸)
→13:10 櫻島焼亡塔 →14:10 埋没鳥居 →15:00 文化会館到着・写真撮影解散

垂水市略図



垂水島津家墓地

垂水島津家の菩提寺・心翁寺（しんのうじ：曹洞宗）の跡です。明治初年の廃仏毀釈により寺はなくなりましたが、ここは垂水島津家第2代以久（ゆきひさ：後に宮崎の佐土原藩初代）以外の16代貴暢（たかみち）までの墓所となっています。

墓の特徴としては、夫婦並立の宝篋印塔（ほうきょういんと）う：明治以降は四角柱墓）であることと、墓域内に多くの供養塔（六地藏塔）が建立されていることです。

また、この垂水島津家墓地は遺族の協力により垂水市に寄贈され、平成20（2008）年7月には市の文化財に、令和2（2020）年には本藩の福昌寺の墓地とともに国の文化財に指定されました。



垂水島津家略系図

（貴久・本家当主）

①ただまさ ②ゆきひさ ③てるひさ

（忠良【日新公】）—— 忠 将 —— 以 久 —— 彰 久 ——

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

久信——久敏——**忠紀**——久治——**忠直**——**貴儁**——**貴澄**

⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯

——**貴品**——**貴柄**——**貴典**——**貴敦**——**貴徳**——**貴暢**

（**太字**は本家等からの養子、下線は明治以降）

故垂城宰川上周賢子墓碑

● 所在地 垂水市本城3530番地

● 歴史的背景

川上忠實は永禄6(1563)年生まれの垂水島津家の家臣。武術に優れ家老職も務めた。龍造寺氏との戦いでは長崎の有馬氏を援け、島原城の戦いにおいて龍造寺右馬太夫の首級を上げた。また本藩の信頼も篤く、文禄(1592)慶長(1597)の役に垂水島津家第二代以久、同三代彰久とともに従軍したが、彰久が朝鮮巨濟島で陣没すると陣代家老を務めた。あるとき陣営を移す際に殿を務め、その甲冑に30数本の敵の矢を受けながらも新しい砦へ到着した。島津義弘はその矢傷に手づから薬を塗って労わったと伝えられる。その後も義弘、忠恒(後の家久)らの信任厚く、茶会等にも召しだされて、佩刀や馬などを賜っている。



元和9(1623)年6月3日、第4代久信の継嗣問題に際して、久信がその嫡子・忠弘(後の五代久敏)の資質を疑い、忠弘を廃して側室の男子を継嗣に立てようとしたことに対して、家老職の忠實や家臣の町田忠照などは諫止に努めた。

ところが、却って久信の怒りを買って、垂水城お仮屋内等において、川上忠實・忠利父子及び町田忠照の三名は誅殺されたのである。そしてその遺骸を心翁寺の家臣団の墓域に葬ることを許されなかったため、心翁寺末寺・福壽寺(曹洞宗)

の住職が憐れみ、当寺の墓域に葬られた。

時が下って寛永12(1635)年、三人の名誉回復が行われ禄も旧に復した。さらに安永3(1774)年、没後150年に当たって、儒学者で邑校・文行館教授である乾徽猷の撰による「故垂城宰川上周賢子墓碑」が墓塔の近くに建立された。

● 市の文化財指定について

この墓域に葬られている三名は継嗣問題に際して、主君(四代領主久信)の行動を人倫にもとることとして諫死した人物である。

そして、墓塔の近くに建立されている「故垂城宰川上周賢子墓碑」に刻まれた文章は忠實の一代記であるばかりでなく、島津家の三州統一の歴史、また島津本家と垂水島津家との関係もうかがえるとともに、乾徽猷の名文の聞こえ高い貴重な歴史資料でもある。

以上のことから、歴史的資料としての価値と併せて垂水の歴史教育の上からも貴重な文化財であることから、垂水市の文化財に指定するとともに、保護し後世へ伝える必要がある。

【墓碑の読み下し(一部)】

是れ周賢子の墓なり。川上は厥の氏、忠實は厥の名なり。厥の先に諱、頼久なる者有り。即ち藩の庶孽の公子なり。実に始めて川上を族とす。
(中略) — 忠光は家相たり。州の上井城を錫ひて焉に遷る。慶長十一年十一月二日卒す。周賢子嗣ぐ。

周賢子の人となりや武毅にして撓まず。智計、人に絶す。天正十二年春、肥前侯・龍造寺隆信、豊筑の兵を以て州の島原城を攻む。城守・義純、援を本藩に請う。公、彰久君をして兵を将いて往きて救わしむ。忠實、焉れに従う。肥の将・龍造寺右馬太夫と戦い、其の首を斬る。公、賞するに璽書を以てす。是を以て威名赫然たり。

文禄元年、豊王遐く朝鮮を征するに、師を大小の諸侯に属す。義弘公泊び世子・忠恒は適ま加徳島に軍す。以久君は焉れに属す。是の時に方りて、佐土原侯・島津忠豊も亦た安骨に軍す。彼れ是れ海を隔つること頗る遙かなり。時に忠豊、病みて床蓐に在り。以久君、忠實を遣わして之を省らしむ。還るに大明・朝鮮の舟艦四十二艘、前みて邀うに遇う。忠實急し。乃ち避けて島嶼に登る。

— (以下略) —

第六垂水丸遭難碑

● 所在 旧垂水フェリー乗船場

● 歴史的経緯

昭和16(1941)年12月8日の太平洋戦争突入以来、日本はミッドウェー海戦、ガダルカナルの戦いなどで敗北を重ね、戦況は日ごとに悪化していきました。

そして多くの船舶が撃沈されたため、鹿児島と垂水を結ぶ垂水汽船など、民間の船も軍によって徴用されたのです。日本は鉄などの物資が不足していたので、海潟の地では物資輸送のための木造船会社が作られました。

昭和19年2月6日の日曜日は寒い日でしたが風もなく良い天気でした。この日の朝に出航する予定の「第六垂水丸」に乗船するために大隅半島全域から多くの人々が集まってきました。そして、出航する際には船の喫水線がひたひたと水に洗われるほどの船客が船上にあふれかえっていました。

これほど乗客を満載した理由は、垂水航路の船が軍に徴用され、船便が通常の12往復から4往復に減らされていたこと、当日は日曜日で遊びや用事で鹿児島に出かける人、中学受験の目の検診に行く子どもたちが多かったこと、さらに鹿児島市から戦地へ向けて兵隊さんたちが出発する情報もあり、家族との最後の面会日であったことなどが重なっていたからでした。

乗船客を満載した「第六垂水丸」は長い栈橋を離れて、鹿児島市へ向かうために舵を切ったところで、バランスを崩しながら転覆しました。船底を海上に見せていましたが、しばらくすると水柱を揚げて海中に沈んでしまいました。午前9時55分でした。

阿鼻叫喚の中、会社の人たちはもちろん町民も船で溺れているたくさんの人々を救い上げたり、救出者を暖めるために、薪や自分の家の板塀などを剥がし、燃えるものを海岸で燃やすなどして、こぞって救助に当たりましたが死亡者540名(令和4年1月末現在)を出すという、海難史上まれにみる大きな遭難事故となりました。船の定員は340名ですが、それ以上の700名を超える人々が乗船していたのです。

この事故は戦争がもたらした悲劇の一つです。



櫻島焼亡塔

● 所在地 垂水市海潟 菅原神社境内

● 歴史的背景

この石碑は櫻島が安永8(1779)年10月1日に大爆発した際、噴石や流れ出た熔岩等により死亡した人々の冥福を祈り、約2年後の安永10(1781)年5月4日、当時の曹洞宗の松岳寺内に建てられた供養塔である。

その後、松岳寺は廃寺となったが、戦後、跡地に垂水町立協和中学校が新設されたこと等に伴い、現在の菅原神社境内に移設された。

● 文化財指定について

垂水島津家第10代貴澄のとき、大噴火により櫻島の多くの島民が死傷(碑文には174人が焼死と刻字)した。この石碑・櫻島焼亡塔は約2年後、領内の曹洞宗の心翁寺以下、同門の9つの末寺、支院が海浜にて施餓鬼会を執り行ったことを記した供養塔で、文章は邑校・文行館の儒学者である市川鶴鳴が撰している。

安永噴火に係る石碑は鹿児島県下でも少なく、碑文は噴火当時の記録史料としても貴重である。また、櫻島の間近に生活する垂水市民にとっても、噴火災害についての戒めともいふべき漢詩文も刻まれており、防災教育という側面からも、重要な石碑であると考えられる。

以上のことから、垂水市指定文化財に指定することによって、保護し後世へ伝える必要がある。



参考：【櫻島焼亡塔・現代語訳（瀬角）】

櫻島は錦江湾の中にある。周回は七里（約8キロメートル）。その正面は鹿児島と相対し、その左ふもとは垂水方面にのびている。安永八（一七七九）年十月一日、噴煙はその背後から出た。雷や稲妻が鳴りわたり、暗闇になったのは七日七夜であった。噴火の火は櫻島のふもとの村落を延焼した。

その時、垂水の殿様（島津貴澄）は役人に命じて舟により島民の千五百有余人を救助させたが、焼け死んだ者は百七十四人であった。垂水の心翁寺の道國和尚は、焼け死んだものの魂が成仏できず、あの世に行けないことを悲しみ、寶樓閣を水辺に設けて施餓鬼会をして、しんだものの魂を慰めたのである。

私（市川鶴鳴）は垂水に遊び、櫻島の背後を望んでその左肩の部分を見れば、火口の穴がはっきりと見える。仏典によると、劫火は（世界の終わりに）三千世界を焼くと書いてある。それを信じない愚か者はこれを聞いて笑うけれども、今回の安永噴火の火はまさに劫火の類ではなかろうか。垂水の殿様が亡くなった島民を成仏させようと施餓鬼会を執り行ったのは正に仁の心である。道國和尚の施餓鬼会をするのは、単に仏法を弘めるためばかりではなく、正に領主・貴澄公の仁の心を幽冥の世界にまで及ぼすのも良いことではないか。そこで、焼亡塔を建てるに当たり、私（市川）に銘文を請うたのである。その銘に曰く、

「櫻島は燃え上り、海（錦江湾）は熔岩の為に沸騰し、噴煙の火は天空を焼く。（熔岩は）地上いっばいに（落ちると同時に赤く割れて）開いて、天地開闢以来、火の中から生まれた蓮の花のようだ。一刻もはやく人々をこの世界（場所）から避難させよ。さもないと、（この世の終わりに起こるといふ）劫火のような噴火の火はこの世を壊滅させてしまうだろう。」

牛根麓埋没鳥居

- 所在 垂水市牛根麓
- 歴史的背景

国道220号線沿いの牛根麓、居世神社東方約500メートルの久富木家所有の小高い丘の斜面にある。

天正2（1574）年、牛根城（入船城とも）落城後、城を守っていた肝付方の名将・安楽備前守兼寛はついに島津氏に城を明け渡した。島津義久は部下の伊集院魯笑斎久道を牛根郷の地頭として治めさせたが、久道は民心を慰撫するためにも、また島津の権勢を誇示するためにも、ここに島津氏の氏神である稲荷神社を天正3（1575）年9月13日に創建し、神田を与えてこれを崇拝せしめたという。ご神体は掛け軸であったと言われるが今は何もない。伊集院久道が牛根城にあった荒神を降ろしてきて合祀したともいわれている。

牛根神社帳によれば、祭日9月13日と11月28日神供三膳、神楽内侍舞、神社四敷二間、上屋茅葺、鳥居石高一丈一尺五寸、向拝より八間とある。

現在は大正三年の桜島大爆発の降灰で埋まっていたのを掘り出したもので、高さ一、四五メートルの鳥居が現存するのみである。社殿の一部には月輪の石灯籠が寄進されたものがある。神舞等の踊りが盛んで大変賑わったと伝えられる。

